

# 虚構に贈る虚構



いとう せいこう

『存在しない小説』という七文字のメモから始まったのだった。メモは『存在しないラジオ』から『存在しない人たち』の声がある中編小説のゲラ直しをしているくらいの時期、スマホのメモ帳に走り書きされた、と思う。

ラジオの話を書いている間中、精神的にきつかった。そもそも自分はその本を書くべきかどうか、根本のところ常に深い疑問があった。書いている毎日、疑問は去らなかつた。

「この単行本の作業が終わったら、とにかく書いていて楽しい小説、読んでいて面白い小説を書きたい」と私は、重しがとれかかった状態でそう思ったし、実際前作が脱稿したあとだったろうが、すでに『存在しない小説』の六つの短編のタイトル、それぞれの話が展開する舞台のことまでスマホにメモってある。

前作にしっかりと集中すれば、ご褒美としてそれら『存在しない

小説』をこの世に紹介出来る。『翻訳』して読者の前にもたらし得る。私にとって強いモチベーションがそれだった。私はこの『存在しない小説』のメモ作業に、まるで凍土の中を歩き続けた人が温かい風呂にたどり着くような安堵と喜びを見いだしていた。

先日メールの整理をしていたら、連載直前に『群像』の編集者とやりとりしている何通かが出て来た。そこで編集者は何編かをまとめて掲載したい、と考えていた。おそらく三編ずつを二回に分けて、であろうか。

しかし、結果的にはそうならなかつた。『存在しない小説』は毎月連載された。理由はこれでわかっていただけではないか。私は一刻も早く書きたかつたし、書いたものをなるべく早く読んで欲しかつたのである。私が今考える、とにかく書いていて楽しい小説は、同時に、とにかく読んでいて楽しい小説で、しかもなる

べく早く読んでもらう必要があつた。

私は自分という読者のためにも、素早い発表を目指した。ラジオに関すること編を読んだ人にも、一方で生の世界を描く小説をどうぞ！と書いたかつた。けれども、今考えると私が想定していた読者は、そうした『生の世界』にいる一般読者だけではなかつた。勝手に想像して書いてしまった（書きつつあつた）『存在しない人たち』のために自分が言い訳のように出来ることが、面白い小説を思いきり書くことだつた。そしてまた、それは小説自体に対する捧げ物のような気もした。虚構に贈る虚構である。

第一回は「背中から来て遠ざかる」。米国東部フィラデルフィアからニューヨークに向かう電車の中に、一人のイタリア系米国人がいる。それだけが私に与えられたイメージだつた。どうしてそのタイトルなのか、今もって説明することが出来ない。

第二回は「リマから八時間」。ペルーの作家が田舎の村で起きたことを書くはずだつた。当初は「リマから六時間」だつたと思う。より辺境に村は配置された。

第三回は「あたし」。マレーシアの首都クアラルンプールを豪雨が襲つた一日、敬虔なイスラム教徒の家に育つた少女シティは迷子になり、決して立ち入ってはいけない地域に足を踏み入れてしまつた。

このように紹介されてゆく世界の短編の間に、必ず編者として私の解説がつく。この地球上から『存在しない小説』を見つげ出すことの意味とは何か。そもそも『小説が存在しない』とはどういう考え方なのか。

書く喜びの中に飛び込んでいった私は、小説の実質的な作業での困難に結局何度も苦しめられたし、解説の難しさにも頭を悩ませた。自分がどうして『存在しない小説』をこの世にもたらしているか、連載途中で説明がつかなかつたが、むしろ私は風呂敷をどんどん広げた。

最終回で絶対にならなかつた。

この、根拠のない自信がなぜ自分を支えていたかについても、明確な答えはない。ただ同じような賭けを私はかつて『豊かに実る灰』という短編連作でしたことがあつた。Tというタロット占い師（『想像ラジオ』の中に出てくる自称霊能者「チコ」のモデルでもある）と組んで、彼女が世界の未来をカードで占い、そこから出て来たキーワードだけをもとにして私は世界中を舞台にした小説を書いたのだった。連載に合わせて数回に分けられた古い作業の、その最後の結果は予想がつかなかつた。にもかかわらず、私は短編の中に通して出てくる男女を設定し、「最終回で絶対にならなかつた」と考えたのだった。

今は長く行方不明になっているTは、若かつた頃の中上健次とも交流のある人物で、文学にもくわしかつた。

彼女はかつて私にこう言つた。

「苦悩する文学は中上さんと終わつたのよ。あの人が全部背負って

いってしまったわよ」

『存在しない小説』は、この言葉に返答しかつた私によって書かれたのである。

(いとう・せいこう 作家・クリエイター)